

今日の三時のおやつはクリームをのせたプリンでした。

みなさんは、プリンをどうやって食べますか？

世の中にはプリンを、スプーンでなく、ナイフとフォークで食べるひともいるのです。

ある小さな王子さまも、その一人です。まるくて小さな島の王子さまです。王子さまはきれいな金色の髪をしている小さな王子さまでしたが、そのおとうさんはりっぱな金色の口ひげをもった大きな王さまでした。小さな王子さまは小さなかんむりを、大きな王さまは大きなかんむりを、それぞれ頭にかぶっていました。

王子さまは今日のおやつを、ハンバーグのように、ナイフで切り分けて、フォークでさして、そーっと口にはこびました。プリンはとてもやわらかいので、注意をしなければなりません。そーっとはこばなければ、すぐに落っこちてしまうのです。

王子さまはそーっとプリンを食べます。もともとこの小さな王子さまは、ものを食べるのがおそいので、そーっと食べていたら、プリンを食べおえるのに二時間と四十分もかかってしまいました。ナイフとフォークでプリンを食べるのは、スプーンでプリンを食べるより何十倍もむずかしいことなのです。

王子さまだけでなく、王さまも、けらいも、男の子も、女の子も、だれのおかあさんもおとうさんも、島にすむひとはみんな、ものを食べる時にはかならずナイフとフォーク

をつかいました。その島には、スプーンもおはしありませんでした。ですから、どんなごはんもおやつもすべて、ハンバーグのように、ナイフで切りわけて、フォークでさして、口にはこんで食べるしかないのです。

ところで、王子さまのおとうさんの王さまは、島の子どもたちすべてと、いくつかの約束をしていました。もちろん、王子さまもです。みんな同じ約束です。

その一、好ききらいをせずのこさず食べる

その二、いいことをしてもらったらありがとうとお礼をいう

その三、わるい魔女がいるので西の海岸には近づかない

とくに子どもたちは、この三つをよくいきかせられていました。ですから島の子どもたちはみんな、もちろん王子さまも、好ききらいをせずのこさず食べ、いいことをしてもらったらありがとうとお礼をいい、西の海岸には近づきませんでした。

そして、島のおとなたちはみんな、王さまが王子さまだったころの王さまとおなじことを約束したので、やはり、好ききらいをせずのこさず食べて、いいことをしてもらったらありがとうとお礼をいい、西の海岸には近づかないようにしていました。

王子さまのおとうさんは王さまでしたが、決していばりませんでした。命令することは好きではありませんから、王さまは命令のかわりに約束をします。もちろん約束ですから、王さまもとうぜん、その約束を守らなければならぬわけなのです。王さまは約束のそこが好きでした。

大きな王さまも小さな王子さまも、大きな王さまがまだ小さな王子さまだったころの大

きな王さまも、島のみんなも、島を出たことはありませんでした。だって、島のまわりにはしおっからい水がどこまでも広がっているだけ！ わざわざそんなところへ出ても、きつと体がしおっからくなるだけにちがいません。

外に、ひとびとがすんでいるほかの島があるというならばはなしはべつですけれども、島のなかで生まれ、島のなかで育ち、そして島のなかで亡くなっていくひとびとは、おとぎばなしにも、島の外の海のはてに島があるなんてきいたことはありません。島にすむひとびとには、生まれ、育ち、そして亡くなるこの島が、世界のすべてでした。

そのつぎの日の三時のおやつは、バニラのアイスクリームでした。

王子さまは、アイスクリームとナイフとフォークをけらいにもってきてもらうと、ありがとうとお礼をいって、さっそくナイフでアイスクリームを切りわけはじめました。アイスクリームはとけてしまうので、注意しなければなりません。はやく食べないと、とけてフォークがささらなくなってしまうのです。

王子さまはもともと、ものを食べるのがおそいので、とくに注意をしなければなりませんでした。

王子さまはナイフをできるだけはやく動かして、フォークもできるだけはやく動かして、アイスクリームを入れた口もできるだけはやく動かして、はやく食べようとするのですが、小さな王子さまの小さな口ではやはり時間がかかります。

王子さまが半分ほどアイスを食べおえたころ、ついにアイスはフォークでさせないほどやわらかく、とろとろになってしまいました。これではもう食べられません。フォークをさしても、ほんのちよつとだけ、フォークのさきにとろとろがつくだけでした。こんなに

ほんのちょっとでは、あまさもおいしさもありません。

とてもあまくておいしいアイスクリームは王子さまの大好きなおやつでしたから、王子さまは食べられないのがなくて、泣き出してしまいました。

王子さまが泣きだしたのにおどろいて、けらいは急いで王さまを呼びにいきました。よすを見にきた王さまは、王子さまの近くによつてたずねました。

「なにがそんなにかなしいんだい」

王子さまは小さな目から大つぶのなみだをながしながらこたえました。

「アイスクリームがとけちゃったんで、もう、フォークでさして食べられない。ぼくはアイスクリームを食べられないんだ」

王さまはむずかしい顔をして、そうか、とうなずきました。

「とうさんはむかし、いまのぼくとおなじくらいの王子さまだったころ、アイスクリームをおやつで食べた？」

「食べたよ。とうさんの大好物だった」

「アイスクリームはとけなかった？」

「とけたよ。フォークでさしてもささらなくて、くやしかった」

「とうさんはのこさず食べた？」

「食べたよ。大好物だったもの」

「どげやって？」

「考えたんだよ」

王子さまには、はじめてきく言葉でした。

「考えるって、なに？ どうすること？」

王さまはむずかしい顔をしていいました。

「たぶん、大きくなるっていうことだろうね」

「ぼくは大きくなるの？」

王子さまはむずかしい顔をしてたずねました。

「大きくなるだろうさ。おまえがいま、いったじゃないか。とうさんにも、いまのおまえとおなじくらいの小さな王子さまだったころがあったんだ。でもこんなに大きくなった。

おまえだって大きくなるさ」

「ぼくは小さいの？」

「そうだ。おまえはまだまだ小さいぞ。ほら、とうさんのかんむりとおまえのを見くらべてごらん」

ほんとうにそのとおりです。王子さまは王子さまにあうかんむりを、王さまは王さまにあうかんむりをかぶっているのですが、その大きさはちがいました。小さな王子さまにあうかんむりはとても小さく、大きな王さまにあうかんむりはとても大きいものだったのです。

「でも、」

王子さまはかなしそうな目をしていいました。じぶんの頭のうえのかんむりを指さして、
いいいます。

「ぼくはまだ、こんなに小さい。考えるなんてできないよ」

そして、かなしくてどうしたらいいのかわからないまま、お城をとびだして行ってしまいました。

王子さまはお城をとびだして、どこにもいくあてもないまま歩きました。歩かないでいれ

ば、かわりにわんわん声をあげて泣いてしまいそうだったので。あまりに大きな声を出して泣けば、お城に帰されてしまうでしょう。お城に帰されてしまえば、とびだした意味がないってものです。

だから王子さまは歩きました。なみだはとまるようすを見せませんが、少なくともわんわん大声はあげていません。

王子さまは、自分がお城をとびだしたわけをさがしました。わけもわからず、ただとびだしたくてとびだしてしまったものです。

でも、お城をとびだしたわけは、貝がらのように砂はまに、かんとんに落ちているものではありません。

王子さまは砂はまを歩きました。砂のせんぶが、落ちている貝がらが、夕日でオレンジ色にそまって、そしてきらきらとまぶしくかがやいています。

夕日は終わりの合図でした。

外であそんでいても、夕日がくれば帰らなければならないのです。それも、王さまとの約束のひとつでした。夜になると、魔女がでるのです。いつもは西の海岸にいる、わるい魔女です。

けれども、王子さまはお城に帰りたくはありませんでした。だから、オレンジ色の海岸を歩きつづけました。

やがて、夕日は沈みました。

まわりはオレンジから、こん色になりました。

「魔女が……」

王子さまはほつりとつぎやきました。

こんなにあたりが暗くなつては、きっと魔女が出ます。魔女のことについては、王さま

は、わるい魔女、としか教えてはくれませんでした。どんなふうにわるい魔女なのでしょう。意地のわるい笑いかたをするのでしょうか。王子さまくらいの小さな子どもなら、一口で食べてしまうのでしょうか。

わるい魔女のことを考えるたび、王子さまは怖くてたまらなくなりました。

夜に外に出ているのは、はじめてのことでした。だから、怖くてもしかたがありません。

「魔女はきつと、——あの空よりも大きいんだ」

空には、きらきらとかがやく星がたくさんありました。お城にいるとき、魔女は怖くありません。外にいるいまは、魔女が怖くてたまりません。けれども大きい空にちらばる星はその反対で、お城の四角い窓からながめるよりも、何十倍もきれいでした。

「——でもきつと魔女より、とうさんのほうが大きい」

王子さまはそう、おもいました。

王子さまは、しらすしらすのうちに西の海岸にいました。もう夜になってからしばらくたっていました。いつしかなみだはとまり、わるい魔女が怖いきもちも少しおさまり、王子さまは少し楽しみながら海岸を歩いていたのです。

夜の世界は、昼の世界とはまるでちがいました。いちばんきれいなのは、星で、つきにきれいなのは、しずかななかによくひびく波の音だと、王子さまはおもいました。

王子さまは、砂はまにすわる、ひとりのおばあさんを見つけました。おばあさんは、しずかにすわって、ただひとりで海をみつめていました。王子さまはおばあさんに近づくと、いいました。

「どうしたの、おばあさん。夜に外にいるとね、いつもは西の海岸にいるわるい魔女に、食べられてしまつたよ」

おばあさんは王子さまを見ました。やさしそうな目でした。

「でも、ぼうやも外にいる。ぼうやは食べられやしないのかい？」

「うん、ぼくは……。ぼくのとうさんのほうが、魔女よりずっと大きいから」

おばあさんはにっこり笑いました。

「それなら、ぼうやといっしょにいればもう安心だ。それに、いつもは西の海岸にいるけれど、夜になったらきつと他のところへいくんだろう？ だったらぎやくに、朝までここは安全だよ。ここは、西の海岸だからね」

王子さまは首をかしげました。

「西の海岸なの？ ここにはおとも子どももこないんだよ。わるい魔女がいるから。おばあさんはどうしてきたの？」

「おや、だからなのかね、ここにあまりひとがきたことはないもの……。じゃあきつと、わたしが、わるい魔女なんだろうかね」

「えっ……。でもおばあさん、ぜんぜん、わるそうに見えないよ。ぼくを一口で食べちゃうようにも見えない」

おばあさんはうれしそうに笑いました。

「わたしはぼうやを、一口でも二口でも食べやしないよ。わたしはね、アイスクリームが好きなんだ」

「アイスクリームだって！ ぼくも大好きなの。あ、でもね、もうぼくはアイスクリームを食べられない……」

「おやおや、どうして」

王子さまはおばあさんとならんで砂はまにすわって、海のほうを見ながら、アイスクリームがとけて、もうフォークがささらなくなっていましたこと、王さまとはなしをしたけれど、かなしくなつてとびだしてきてしまったことをはなしました。

「考えるなんて、むずかしくってできっこない」

「そんなこともない。考えるのは、なれき。なれば、考えるなんてかんたんだ」

おばあさんはそういって、すぐちかくに落ちていた、二枚貝の貝がらをひろいました。

「ぼうやはこの貝がらで、海の水をすくえるだろう？」

王子さまはうなずきました。

「じゃあ、この貝がらで、とけちまったアイスクリームもすくえるはずき。いいかい？ 海と、とけたあとのアイスクリームなんて、すぐちかうように見えても、しゃっばいかあまいか、そのくらいのちがいがいしくないんだよ」

おばあさんは、ゆかいそうに目を細めて笑いました。王子さまは首をかしげました。

「おばあさんは、わかるようでわからないことをいうんだね。それが、魔女の魔法なの？」

「魔女じゃないよ。わたしも、ぼうやたちとおなじ人間さ。ただし、ここの生まれじゃない。大陸からきたんだよ」

おばあさんは、しわしわの指でまっすぐ、西の海のほうを指しました。

「大陸って、なに？」

「この島よりも、何十倍も、何百倍も、いや、きっと何千倍も広い、それはそれは大きな島さ。海の間こうに——見えないくらい遠くに、あるんだよ」

「海の間こう？」

王子さまはびっくりしました。

「海の間こうにも、島があるの？ ここよりも何千倍も広いんだ！」

「そうだよ。しかも、大陸はそればかりじゃない。ここより何百倍広い大陸も、ここより何億倍広い大陸も、いくつだってある。大きさをなんて気にしなけりや、島なんていったら、空を見あげていっぺんに見える星の数よりもあるんだ」

「海の間こうにも、たくさんの世界があるんだ……。おばあさんは、見えないくらい遠くから、海をおよいで、ひとりできたの？」

「いいや。なかまといっしょに、舟ののってきたんだよ。なかまたちも舟も、どこかにいってしまったけれども」

「舟？」

「のりものだよ。ひとをのせて浮かぶんだ。それにのって、板でこいで進むんだ。およがないでも海をわたれる。ちょうど、こんな……この貝がらみたいなかたちをしてるんだ」

「大陸には、舟が、ぼくの知らないものがある。

ねえ、おばあさん。ぼくは舟をつくるよ。大陸へいくんだ。舟のつくりかたを教えてくださいよ。舟ができたら、おばあさんもいっしょに大陸へいこう」

「おやおや」

おばあさんは目を丸くしたあと、嬉しそうにほほえみました。

王子さまは二枚貝の貝がらをもって、お城にかえりました。お城では門のところ、けらいたちと王さまが王子さまのかえりを待っていました。

「ねえ、とうさん。ぼくはもうアイスクリームを食べられるよ。とけちゃっても」

王子さまはそう誇らしげに言って、貝がらを見せました。

そのあと、とけてしまったアイスクリームをゆっくりと味わって食べながら、王子さまは西の海岸であったおばあさんのはなしをしました。わるい魔女なんかでなく、とてもやさしそうなおばあさんだったこと。大陸という大きな島からやってきたこと。

「とうさん。大陸には、とうさんよりも大きな王さまがいるかもしれない。ぼくね、おばあさんに舟のつくりかたを教えてくださいよ、大陸へいきたいんだ。大陸で、いろんな知らないことを知ってきたいの」

王さまはなにもいわずにはほえんで、王子さまの頭のうえの小さなかんむりを取りあげると、かわりにそれまでのよりも少し大きいかんむりをのせました。

「おまえが舟をつくって大陸にわたり、そこでいろいろなことを学んでもどつてくれば、そのとき、お前のかんむりはとうさんのより大きなものになるだろう。おまえはとうさんより大きくてりっぱな王さまになれる。

ただし、おばあさんにありがとうをいうのを忘れちゃだめだ」

王子さまは元気にうなずきました。

「うん、忘れるわけないよ。いいことをたくさんしてもらったんだもの」

王子さまは、王さまに貝がらを見せて、うれしそうに笑いながらいきました。

これから、長い旅が始まるのです。

頭のうえのかんむりが、とてもあっている王子さまの旅です。